

Title	観智院本類聚名義抄(貴重圖書複製會)
Sub Title	
Author	保坂, 三郎(Hosaka, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.1 (1937. 4) ,p.158- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

であつて、それに關する論文著述等は尠くない。殊に檔案は明清史研究者の看過することの出来ぬ史料であり、近代史料中の白眉である。

明清の檔案は故宮文獻館内の内閣大庫、軍機處、及び内務府の三箇所に收藏されてゐるが、内閣大庫の檔案は曾て一部流出し、北京大學、中央研究院歴史語言研究所、及び旅順の庫籍整理處の三箇所に收藏されることになつた。此の庫籍整理處を筆者は參觀したことがあるが、其の整理事業は最近完了するに至つた。即ち大庫史料目錄六編が刊行され、其の他明季史料零拾、國朝史料零拾、太祖高皇帝實錄、史料集編初集、同二集等の貴重な史料が上梓されたのである。尙北平の文獻館も留學中見學したことがあるが、大部分南遷した後のため、現存檔案は甚だ少く、清軍機處檔案目錄其の他檔案の目錄書は少ないが、死兒の齡を數へるに等しく、一抹の寂しさは之を如何ともすることが出来なかつた。然し近時、南方及び北平二箇所に於ける檔案の整理事業が大いに進捗したことは、學界のため寔に欣快の念を禁じ得ない。而して此の間の消息を雄辯に物語るものは實に此の文獻論叢である。

本書は北平故宮博物院十一週年紀念として去年の雙十節に文獻館より印行されたもので、一昨年の雙十節に故宮博物院十週年紀念として文獻館より刊行された文獻特刊と本書を併讀する要がある。

本書に収録されてゐる論文は大部分檔案に關したものである。次に主な執筆者諸氏と其の論題を掲げる。

清内閣漢文黃册聯合目錄序

蔡 元 培

四庫提要中之周亮工

陳 垣

擬梁曜北答段懋堂論戴趙二家水經注書

孟 森

論清光緒時之財政

吳 廷 燮

庫倫方輿紀要序

吳 廷 燮

撫畿疎草跋 附張鳳翔列傳攷證

朱 希 祖

禹貢學會的清季檔案

顧 頡 剛

右の外、李德啓氏の滿文老檔之文字及史料、方甦生氏の清代檔案分類問題、張德洋氏の軍機處及其檔案、王梅莊氏の清代黃册中之戶籍制度、單士元氏の清代檔案釋名發凡、單士魁氏の内閣大庫雜檔中之明代武職選簿等有益な記事が少くない。又本書に貴重な圖版が少からず収録されてゐる。筆者は文獻館長沈兼士氏其の他檔案整理に力を盡された諸氏に敬意を表し摺筆する。(昭和十二年一月、宮島貞亮)

觀智院本類聚名義抄

(貴重圖書)
復製會

類聚名義抄は漢字及び漢語を標出してそれに音訓并に國語を注記した古代の字書である。これは新撰字鏡のやうに漢字で委しく義を註するといふことが無く、又和名類聚抄のやうに漢語の出典を記すことも殆んど無いから、それらより遙かに多く日本化したもので、その體裁は漢和對照の字書といふべきものである。(山田孝雄博士同書解説)

こゝに複製刊行された類聚名義抄は觀智院本全部(十一帖)である。世に知られた類聚名義抄の異本は其他に西念寺本、蓮成院

本、高山寺本等があるが、孰れも原本の所在はわからない。古鈔本として現存するものはこの觀智院本だけである。

和名抄や、新撰字鏡、色葉字類抄、篆隸萬象名義等が既に複製刊行せられてゐるのに、類聚名義抄のみは幾回かの計畫はなされたさうであるが、遂行に到らなかつたことは寧ろ不思議な位であつた。然るに今度貴重圖書複製會よりこの觀智院本全部が美事に複製刊行せられたことは欣快に堪へない。始めて類聚名義抄を世に知らしめたのは伴信友であるが、其後黒川春村も小杉樞邨もこの書を自ら校合し詳細な點に到るまで注意をはらつてゐる。然も集録した語數も和名抄等に比して極めて多いにもかゝらず、和名抄に於ける箋註の如き大著としても現はれず、其後も割合に等閑に付されてゐるのではあるまいか。それは傳寫本も多くなき、異本も少ない爲でもあらう。又觀智院でも極めて祕藏して仲々みせてくれない爲でもあらう。幸にも我慶應義塾の圖書館には阿波國文庫舊藏本がある爲、博物館のガラス越しにみた記憶を時々この本で新にしてゐたのであるが、今現代科學の力によつて、原本の眼前に髣髴たるは驚く他ない。勿論觀智院本は必ずしも高山寺本等に比して極善本といへず、誤寫と思はれるものも尠からずあるが、現存する唯一の完本であることが何といつても他の諸本に勝るものである。

我々が根本史料を繙くに當つて最も困難を感じることは、同じ文字でありながら、その文字が現在意味する内容と、かつて意味した内容との間に相當の相異が生じ、該史料の作製せられた當時その文字の意味した内容が、現在の我々の智識を以ては解し難い

といふ點であらう。今私はここに『活動』といふ言葉を想起する。この言葉が極短期間であれ、ムーヴィングピクチャーを意味し、現今では又同じ内容を持つ『映畫』といふ言葉の方が一般に行はれやうとして居る。もしこゝでこの『映畫』を意味する『活動』なる語が自然に消滅したならば、必ずや後世の人々は我々が源氏物語に於てなしたと同様な手間と努力を以て明治大正時代の小説に註することにもならう。和名抄や類聚名義抄等が現今残つてゐる爲にこんな言葉を我々は如何に知り得たか計り知り難いものがある。更に類聚名義抄には漢字の異體を極めて豊富に掲げてゐる事、或は又處々に散見する假名の古體等も總て研究の對象ならざるはない。

最後に希望として申し述べたい。切角觀智院本を複製刊行した上は、更に其他の異本もこの際、追加刊行して欲しい。山田博士も解説に三四例擧せられて居る如く、高山寺本の如き特に類聚名義抄研究の上には缺く可からざる本である。周知の如く高山寺には玉篇・篆隸萬象名義・和名抄等文字に關する特異の書物を藏してゐた點等を考へると、決して偶然にそれ等を持ち合はせたと信じ難い。そんな意味からも是非此際敢行して欲しい。(保坂三郎)

日本文化史點描

(西村眞次著
東京堂發行)

著者の最近發表された短篇を集録されたもので、巻頭には曾つて「日本研究」に掲載された「邪眼厭勝としての石敢當」が掲げられてゐる。これには同論文發表當時本誌に一言述べたことがあ